

基地NO.1の民意6 686筆の署名提出 とあ第二ラウンドの議会で条例制定へ

宇治市民の会 奥森 祥陽

平和・宇防備地域をめざす宇治市民の会は6月1日、宇治市選挙管理委員会へ6,688筆(法定数3,063筆の2.18倍)の署名を提出しました。今後、署名の審査、縦覧を経て6月末〜7月始めに本請求の運びとなります。署名運動に駆けつけていただいた仲間みなさんに心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

あたらな境地を開いた宇治市の取り組み

一ヶ月間の署名運動を振り返ってまず思うのは、ホンマにやっちゃった」ということです。と言うのも、大久保と黄檗(おつばく)地域に2つの自衛隊基地をかかえている宇治市で、どの政党・平和団体も「自衛隊基地の撤去」を言わない中で、「基地の撤去・廃止」市民参加の平和のまちづくりの推進」を正面に掲げた「無防備・平和のまちづくり条例」の直接請求署名運動に取り組み、法定数の倍を超える署名を市民の共感とともに「集めてしまった!」から

です。しかも、署名運動最終日(5月27日)には、陸上自衛隊大久保基地正面ゲート前で、自衛隊員が創立50周年記念式典の看板の撤去作業をしている真ん前で、堂々とカウントダウン行動をやり、記念撮影までしてしまつたのです。

「基地のまち」の認識を深めた

私自身、この一ヶ月は、「基地のまち宇治市」の認識を深めた一ヶ月でもありました。黄檗基地(宇治駐屯地・関西補給処)は、明治27年に旧陸軍宇治火薬製造所として開設され、戦後は(規模は縮小して)陸上自衛隊の駐屯地となつています。黄檗基地の歴史は優に百年を超えます。一方大久保基地(大久保駐屯地)は京都防衛のための一大軍事プロジェクトとして、京都飛行場の建設が計画され、昭和17年に完成しています。大久保基地の歴史は90年以上になります。歴史と文化のまち宇治市は、百年以上にわたって基地のまちだつたのです。

だからといって、これからずっと基地のまちとして存在していい

のわけがない。そんな思いが深まつた署名運動でした。

自衛隊員・家族関係者とも対話

基地のまちでの署名運動なので、自衛隊員や家族とも数多く対話が生まれました。最後まで話を聞いたうえで「現職の自衛官なので、署名はできません」と断つた若い隊員。「夫がイラクに行っている。署名はかんにんして」という隊員の妻。娘婿が隊員だけど「海外に行くのはおかしい」と署名をしてくれた家族の方。

自衛隊員関係者といつても、今の状況をすべて肯定している訳ではないことがわかりました。また、「あんならの言うことは分かるけど、妻が自衛隊の厚生会で働いている。基地がなくなつたら生活できんから署名はせん」(飲食店の)隊員はお得意さんなので、基地がなくなつたら商売できひんようになる」と言う声も寄せられた。基地経済に依存している実状がいかい見えたと対話でした。

基地撤去は市民の願い

「自衛隊基地をなくして、老人ホームや保育所を作ります」「基地の跡地利用、平和のまち基本計画を市民参加でつくります」との呼びかけに、「そりゃいいわ」と多くの市民が答えてくれました。基地撤

去やいうてもそんな無理やる」との反応には、「基地撤去の条例をつくれれば、国に強く働きかけることができる」と訴えて理解を広がってきました。また、「自衛隊がないと誰が守ってくれるの」との声には「紛争になつたら真つ先に攻撃されるのが軍事基地」「軍隊は市民を守らない」などの対話の中で、「そりゃね。基地のそばは危険やね」と理解が深まっていきました。

一ヶ月間の署名運動の中で明らかになつたことは、誰もが基地は仕方がないものだとは考えていないこと、基地撤去は市民の願いであるということ。そして、市民との対話そのものが確かな平和を作り出していく原動力である、²とゆうことでした。

私たち宇治市民の会は、今回の署名運動で基地のないまちをつくりを力強くスタートさせることができました。今後、市議会での論戦に移ります。「基地のない宇治市をどうつくっていくのか」を正面に掲げて市長、各議員(会派)への創意工夫ある働きかけをしてきたいと考えています。引き続き、支援・連帯をお願いします。

* 条例実現のつどい
6月9日(土)13:30 宇治市生涯学習センター
* 条例実現にむけたシンポジウム
7月8日(日)午後 城南勤労者福祉会館